

# 永田鉄山の真崎甚三郎宛書簡

川田 稔 (kawada@info.human.nagoya-u.ac.jp)

溝口 常俊・服部 亜由未

[名古屋大学]

Letters from Nagata Tetsuzan to Mazaki Jinzaburo  
 Minoru Kawada, Tsunetoshi Mizoguchi, Ayumi Hattori  
 Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, Japan

## Abstract

It is known well that in the early Showa period there were contentions between two factions of army officers; the Imperial Way Faction (Kohdoh-ha) and the Control Faction (Tohsei-ha). Nagata Tetsuzan was a leading figure of the Control Faction and Mazaki Jinzaburo, the other. Nagata sent letters to Mazaki. This paper introduces five of them in Mazaki Collection owned by Modern Japanese Political History Materials Room in National Diet Library.

## Key words

Nagata Tetsuzan, Mazaki Jinzaburo, imperial way faction, control faction, Japanese army

## 1. 書簡の背景

昭和期の陸軍において、皇道派と統制派による激しい派閥抗争があったことはよく知られている。この派閥抗争において、統制派の指導的位置にあったのが永田鉄山であり、皇道派の中心人物が真崎甚三郎だった。

その永田鉄山から真崎甚三郎宛の書簡が、真崎甚三郎関係文書（国立国会図書館憲政資料室所蔵）に5通残されており、本稿はそれを紹介するものである。

永田鉄山は、1884年（明治17年）長野県に生まれ、陸軍士官学校、陸軍大学を経て、陸軍中樞に入った。その後、陸軍省軍務局軍事課高級課員、同整備局初代動員課長などを歴任するとともに、陸軍中堅幕僚層の中核的存在となった。満州事変（1931年）から満州国建国にかけての時期には、軍務局軍事課長という実務上もっとも重要なポストに就いており、また、五・一五事件（1932年）から日中タンクー塘沽停戦協定をへて華北分離工作が本格化する時期、参謀本部第二部長（情報部長）、陸軍省軍務局長として陸軍中樞の要職にあった。だが、軍務局長在任中の1935年（昭和10年）8月、陸軍内部での皇道派と統制派の抗争激化のなか、皇道派系の相沢三郎中佐によって執務室において刺殺された。二・二六事件は翌年、日中戦争突入はその翌年である。永田の影響は、その後、武藤章（陸軍省軍務局長）や田中新一（参謀本部作戦部長）、東条英機（陸相・首相）らへと受け継がれる。

真崎甚三郎（1876年～1956年）は、佐賀県生まれで、皇道派の実力者として満州事変後、参謀次長、陸軍教育総監などを務めるが、永田暗殺の直前、永田ら統制派によって陸軍要職から追われる。

さて、満州事変前の1929年（昭和4年）、永田ら陸軍中央の中堅幕僚グループによって一夕会が結成された。一夕会は、陸軍人事の刷新、満州問題の武力解決、荒木貞夫・真崎甚三郎・林銑十郎の擁立を取り決めた。陸軍人事の刷新とは、当時陸軍主流をなしていた田中義一、宇垣一成（もと陸相）を中心とする田中・宇垣派の陸軍支配の打破を意味し、荒木・真崎・林は、当時の陸軍反主流派である佐賀派につながる将官であった。つまり、一夕会は、佐賀系である荒木・真崎・林らを擁立することによって、田中・宇垣派の支配する陸軍を刷新しようとしていたのである。

ただ、永田については、国家総力戦認識や、軍装備の機械化のための陸軍軍縮などの問題で、真崎よりは宇垣派に近く、真崎らと接近したのは、満州事変以降もしくは第二次若槻内閣末期からだとの見方がある。

いずれにせよ、少なくとも満州事変期の後半、第2次若槻内閣総辞職（1931年12月）前後からしばらくは、永田と真崎は密接な関係にあったことは間違いない。

たとえば、若槻民政党内閣総辞職後、犬養政友会内閣成立時、永田は、同郷の政友会有力者小川平吉に、陸相として、真崎に近い荒木貞夫か林銑十郎を推薦し、真崎と対立していた宇垣一成（元陸相）に近い阿部信行について、陸相として「絶対に適任ではない」と伝えている。

この時点では、明らかに真崎に近く、宇垣派に批判的なスタンスをとっていたことが分かる。

以下に紹介する永田の真崎宛書簡は、上記のように議論が分かれている満州事変以前の永田と真崎の、永田と宇垣派の関係、さらには、一夕会結成以前からの永田らによる陸軍中央人事工作の動きを示唆するもので、興味深い内容をもっている。

永田の真崎宛書簡5通のうち、最初のもの（書簡①）は、1928年（昭和3年）末執筆のもので、また5通の内4通

が一夕会発足以前に発信されている。その4通は1928年末から翌年1月にかけてのものとして推定され、おもに永田と親しい山岡重厚や工藤義雄（ともに、のち一夕会員）の陸軍中央課長ポスト就任工作に関するものである。当時真崎は、弘前の第八師団長であった（1927年8月から1929年7月まで）。

ちなみに、書簡①、書簡③、書簡④の封書表書きは、「第八師団司令部真崎中将」宛となっており、書簡②は、単に「真崎中将」宛となっている。

なお、永田は、1926年（大正15年）10月から陸軍省整備局動員課長、1928年（昭和3年）3月から1930年（昭和5年）8月まで歩兵第三連隊長であった。

また、5通の内1通（書簡⑤）の封書表書きは、「参謀本部真崎中将」宛となっており、朝鮮満州国境の新義州から発信されていることから、永田が満州・華北出張中の1932年（昭和7年）10月から11月の間に出されたものと推定される。真崎は1932年（昭和7年）1月から翌年6月まで参謀次長の職にあり、永田は1932年（昭和7年）4月から、参謀本部第2部長（情報部長）となっていた。

なお、現在公開されているかぎりでは、永田の宇垣宛書簡はなく、宇垣日記にも永田暗殺時以外に永田に関する記述はない。また、永田の荒木貞夫宛書簡、真崎・宇垣・荒木の永田宛書簡はみあたらない。

## 2. 書簡内容

### 2.1 書簡①

謹奉賀新年

山岡の件は不取敢川島閣下と御打合致し其結果工藤と共に先づ補任課長候補に編入尚両兄の中何れかを総監部第二課長との諒解を得申候尚直接総監部方面へ交渉致すべく候奉天の事奏閣下等の御儘力大に手伝ひ好転の曙光を認め候は何よりに存候

（十二月廿七日記）

昭和四年一月元旦

永田鉄山

真崎中将閣下

虎閣下

### 2.2 書簡②

謹啓愈御壯武奉慶賀候

山岡大佐の件は其後末松大佐とも懇談同大佐より前本部長の諒解を求むる事に致し置候（前本部長在職当時人事を予定せし時山岡を候補とする件前本部長拒否せり）為第二課長の候補たる事は殆んど確実と存候前便申上候人事局長閣下と御話致候結果と相俟ち山岡工藤の何れかを補任、教総第二課何れかに据ゆる件愈々確実性を増し候次第御了承願候但し好事魔多く候へは今後共御高配謝上候

重大問題に関しては閣僚の一人とも種々談合致し候も何分癌は陸軍首脳部の腹中に有之懸念に不堪候今は殆んど政界の雲行に依り方向を定めらるるの情況に在るやに存候適良なる帰結の為同志まことに螻蛄の斧を揮ひ居し、折角御自重祈上候寸刻を偷み乱筆如斯に御座候

拝具

真崎閣下

永田鉄山

執事

### 2.3 書簡③

謹啓酷寒之砌愈々御清勝奉大賀候

陳者山岡兄の件小生後任に極力推挙を試み候も不成効に了り此方に付多分岩橋が来る事と相成るべく終り中央部課長の問題に一頓挫を来り候も第二案として三月の移動には山岡兄を士校附（定員外）と致し置き欧米視察の結果を学校教育に資する為八月迄其儘とし八月には総監部第一第二課長及本省補任課長の昇進を見るべく其何れかの位置に充つる事と致しては如何と存ぜられ候に就ては同僚にて夫々各方面へ此方針にてわたりをつくる事に申合せ候も尚閣下より右の旨士官学校長及人事局長辺へ御御連絡被下候は、仕合と存候此方法も不成効とせば此際隊附以外方法なかるべしと存候尚三月には徴募課長も転出の噂有之候に於ては其後任に天野又は田中の如きを据ゆべく必ず一派の策動有之と存此の防遏の為には篠塚を同課長の後任としては如何かと談合罷在次第に有之候岡村の再婚の件は先般同人と直接談合致候も子供の幸福の為当分独身を継続致すとの意思鞏く他に原因は無之模様有之子供が相当軍齡に達したる迄再婚するも晩からずとの底意何にやに付度致され候に付き姑らく其儘と致し機を見て促進の考に有之候二月頃には或は錦地方面へ出張仕るやも不知小生参向不能とするも課員出向く機会有之候に付御用有之候は、御下命願之置候右不取敢用件のみ如斯に御座候治節柄御自重専一に奉附上候

拝具

一月十二日

永田鉄山

真崎閣下

虎閣下

### 2.4 書簡④

謹啓仕り候山岡兄の件前回御報申上候

夫々の方面へ車を進め候所其後略々確かと存ぜられ候情報に依れば来る八月の移動は豫て想像致候略大規模には無之中央

部課長の移動の如き極小範囲に止る見込の  
趣に有之斯くては情況判断の基礎全く  
異なる次第にて果して然りと致候へは寧ろ此際  
速に連隊長を終るを適當と考へられ候  
就ては林閣下及同僚とも相謀り前申上  
候策動は中止致す事と致し候右御了承  
奉願候先は右不取敢御報迄如斯に  
御座候  
時節柄御自重專一に奉祈上候

拝具

一月廿六日

眞崎閣下  
劍下

永田鉄山

## 2.5 書簡⑤

謹啓冠省御免被下度候

一、途中土肥原少将と数時間会谈仕候  
同少将は北滿情勢の推移に就ては北滿離  
任の当時より或程度の不安（要人との連絡、懐柔  
統治要領等に関し）を抱きたる趣にて蘇丙文  
の向背に閣下らは特に介意しなりし由今より約一ヶ月  
前にも蘇より日本へ使者同少将の許に参り人  
事上の不平やら境遇上の苦衷やらを訴へたる事有之  
当時同少将よりは大局の動向に鑑み此際特に自  
重忍従事を決し軽挙をなすことを切に警め  
置き候趣同使者が事変生起前丙文の許に  
帰着せしや否やは目下尚不明に有之候土肥原  
は丙文を能く識り居り候に付き事端解決に若干  
なりと役立たしむる為丙文宛土肥原より帰順勸  
告の一書を認めしめ携行致す事と致し候関東軍と  
連絡の上要すれば右書面を事端解決に利用致す  
心算に有之候事端の原因は小官等の觀察と  
同様に土肥原少将も観測致し居り政治的解決は  
幾分手遅れの感なるも見込なりとは申し難く萬已  
むを得ざる場合或は軍の威武を示さねばならぬ事  
となるやも測り難しとの意見に有之候  
内文事件に関聯し先般岡村少将と打合せ候  
「滿州国政治指導方針」に関し意見交換の結果  
同少将も全然何れに〔も〕同感にて何の方針が徹底し又  
之への運用宜しきを得指導者の人選宜しきを制  
せは将来統治上大に成果の向上を期し得べく内文  
事件の如きも或は避け得ざりしには非ずやと申居候  
熱河及京津地方に対する施策の為有力なる統一的  
特務機関の設置（天津又は錦州已むなくは旅順）  
に関しても意見を交換致し候が大体一致致し候此  
等の研究は向後帰京迄に尚研究を続け結論を  
報告致すべく候（施策要領と共に）  
二、京城に於ては軍司令部と種々打合せ致し軍司  
令官閣下と両三時間会谈致し候尚総督は新  
聞情報に依已でに内地に趣かれ不在のことと豫期  
致し居候折大演習直前帰朝の由にて京城に居られ  
御用掛将校を通し会見を申込み候に就き

「プログラム」に心を籍り約三十分を限り面談致し候  
国体情勢、外交問題、滿州統治問題、朝鮮人の思  
想傾向、朝鮮兵備問題等に関し意見を述べられ故らに  
内政問題等に觸るるを避け別に質問も無之他意なき  
を装ひ居られ候  
軍司令官よりの御伝言も有之候か帰朝後に譲るべく軍  
司令官以下軍の諸官並総督共に近時関東軍か  
朝鮮の希望を容れ当初の予想よりも早期に東辺  
道討伐を行ひしに討に深甚の時意を表し居られ候  
三、只今当地発飛行機にて奉天に向ふべく候  
薄氷と降霜とを見候

於新義州  
永田鉄山

眞崎次長閣下

（「眞崎甚三郎関係文書」（国立国会図書館憲政資料室所蔵）より）

## 3. 書簡からの示唆の一面

以上のように、これらの書簡で永田は、山岡重厚・工藤義雄を、陸軍省補任課長か教育総監部第二課長に就けようと、自身らが様々な働きかけをしていることを伝え、眞崎に陸軍中央工作への協力を依頼している。また、川島義之（当時人事局長）、林銑十郎（当時教育総監部本部長）らとも相談していること、滿州で秦真次（当時奉天特務機関長）の助力をえていること、なども知らせている。さらに、陸軍省徴募課長の後任に田中・宇垣派の「策動」が予想され、その「防遏」のために対抗処置をとる必要があること、「癌は陸軍首脳部〔田中・宇垣派〕の腹中」にあるとの判断などが記されている。なお文中で多出する山岡重厚は、1928年（昭和3年）3月から歩兵第22連隊長で、翌年8月、教育総監部第二課長となっている。工藤義雄は、当時歩兵第6連隊長だった。

川島、林、秦は、濃淡の差はあるが、いずれも眞崎と繋がりがあった。当時永田が眞崎らと近い関係にあったことが分かる。なお、眞崎は、1929年（昭和4年）7月から東京の第一師団長となる。当時永田も、先にふれたように、同師団の歩兵第三連隊長であった。

本書簡は、多様な関心から様々な示唆を引き出しうるものであり、本稿では書簡内容の紹介にとどめ、これ以上のコメントはさしひかえたい。

（受稿：2011年11月13日 受理：2011年11月21日）